



Oasis オアシス・ミーツ・ブックス meets Books

本のあるオアシス 本のある人生

||||| 2023年7月 vol.22 **+** Plus |||||

私が好きな作家の1人、高村薫がグリコ・森永事件（1984～85）に着想を得て執筆した「レディ・ジョーカー」を紹介します。

この事件は大企業と警察、マスコミ、国民を巻き込んだ日本で最初の劇場型犯罪であり、当時小学生であった私も強い衝撃を受け、日々の報道に夢中になった記憶があります。犯行グループ「かい人21面相」は複数の企業を脅迫するものの、現金を手にした事実は確認されておらず、よって犯人や犯行の動機、終息に至った理由などの真相が解明されないまま時効を迎えたことで、その魅力と薄気味の悪さは今も色褪せません。

本作はもちろんノンフィクションであり登場する個人や団体は架空のものですが、実際に発生した事件や事象が散りばめられていることから、単なるエンターテインメント作品ではなく、作者がグリコ・森永事件の真相を求め徹底的な調査・分析・考察のうえ点を線に繋げたルポタージュのように思えてなりません。

物語は、個人薬局店主の物井が、自身の3人の身内に起こった不幸が大企業「日之出麦酒（ビール）」に起因していることを知り、4人（+1人）の仲間とともに復讐を決意することから始まります。彼らはまず、日之出麦酒社長の城山を誘拐するものの身代金は要求せず、あるメッセージを残して解放します。その後「レディ・ジョーカー」を名乗り、商品への毒物混入を仄めかしたうえで日之出麦酒に現金を要求、しかしその受け渡しはいずれも未遂に

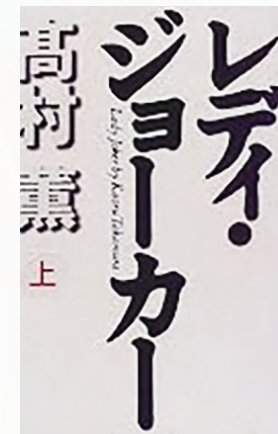
終わります。実はこれはカモフラージュであり、裏では安全・確実に現金を手に入れるため、そして物井の恨みを晴らすための真の取引が存在していました。これによりレディ・ジョーカーは日之出麦酒と警察、そして城山と他の重役を分断させることに成功し、無関係の人々にほとんど危害を与えることなく目的を達成するのですが、真相に気付いたアンダーグラウンドの魑魅魍魎がレディ・



医療法人 隆星会  
社会福祉法人 大和福寿会  
管理部 部長

吉本 大輔

レディ・ジョーカー  
／ 高村 薫



ジョーカーに乗じて日之出麦酒や別の企業に触手を伸ばし、事態は物井たちの想定外の展開を見せることになります。

私はこの作品を何度も読み返しており、若い頃は犯罪者と被害者、そして警察の織り成す事件や駆け引きといった行動やその結果（イベント）の展開を娯楽的に楽しんでいましたが、年を重ねるに連れ、登場人物たちの自分自身や他者、属する組織、世間に対する複雑で薄暗い感情、そしてこれらが集積し交錯することによりイベントが引き起こされる過程に惹き込まれるようになりました。自身が壮年期に移り、仕事で関わる人々の性格や性質、考え方、好き嫌いなどを量る機会が増えたことで、作者の人間心理に対する深い思索と分析の理解が進み、それらを的確かつ緻密に伝える表現力の凄みを徐々に実感できるようになったからでしょう。膨大な取材や研究に基づく高度な専門知識で武装された重厚なストーリーと繊細な人間描写、これが高村薫の大きな魅力です。

実は私は、「レディ・ジョーカー」（1997）以降の高村薫作品は読んでいません。就職して忙しくなり読書から離れてしまったこともありますが、より大きな理由は、次作の「晴子情歌」（2002）の旧仮名遣いによる文章、そして物語の展開が見えてこない長い序盤にくじけたためです。この「晴子情歌」とそれに続く「新リア王」（2005）、「太陽を曳く馬」（2009）はそれまでの作風と異なり、政治や宗教、芸術を題材として人間の存在の根源に迫るもので思想的・哲学的な趣が強く、その難解さゆえに完読できず離れていったファンは少なくないようです。なおこの三部作で高村薫は言論家としても高い評価を得ます。

この原稿を書いていたら久しぶりに偉才に挑戦してみたくなり、実家から黴臭くなった「晴子情歌」を持ち帰ってきました。併せて、ネットショップで「新リア王」「太陽を曳く馬」も購入しましたが、果たして読み解くことができるでしょうか…。



Oasis オアシス・ミーツ・ブックス meets Books

本のあるオアシス 本のある人生

2023年7月 vol.22 **Plus**

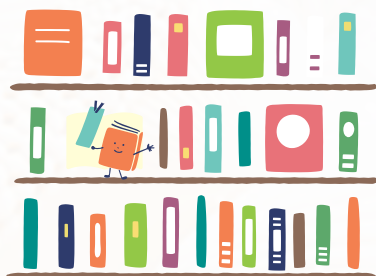
Oasis meets Booksも発刊から5年、この7月号でVol. 22、発行を重ねるごとに紙面を通して事業所を超えた職員間の交流が広がっただけでなく、ご利用者様やご家族様、お取引関係の皆様におアシスに勤務する職員の人柄が伝わってきたのではないのでしょうか。

今回ご紹介する本は「シンギュラリティ・ショートショート」、話題のChatGPT、人工知能AIについて解説する本です。

ChatGPTやAIに関係する書籍は巷に溢れており、どれも難しい本ではないかと思われる方も多数いらっしゃると思いますが、この本は12の短編を中心に、ChatGPTとは何か、今までのチャットボットとはどのように異なるのか、ベースにあるAIとは、そしてその先にあるシンギュラリティとは、読んでいて何となく理解した気になれる超入門編と言える、とても読みやすく分かりやすい内容ですので、AI（人工知能）進化の波に「乗り遅れた」と感じている方にはお勧めです。

人間の能力を超える技術革新は人類の存在への脅威？ スマホ、パソコン、インターネット・・・どれも人間の持つ能力を超えているのにそのような意見は耳にしません。考えてみると人間にとって便利な物は殆どすべて人間の能力を超えていることに気がつきます。

AIが言葉として1956年に定義されてから、今では自動運転やお掃除ロボット、音声認識等、人工知能は非常に身近な存在となりました。



しかし現在のAI（真の意味ではAGI、ASI）は世界中に溢れるインターネット上の膨大なデータに自らアクセス、アルゴリズムによる機械学習とは異なるディープラーニング（深層学習）を実行、とても合理的で冷徹な戦略や解決策も構築することから、人間の思考や思想、感情や想像の及ばない、つまりコントロールの効かない可能性（これ



医療法人 隆星会  
社会福祉法人 大和福寿会  
営業部 部長

神田 稔幸

シンギュラリティ・ショートショート

／ 浅見 陽輔



そAIに期待している人間を超越した能力とも言えます）が人類の存続を脅かすのではないかと危険視され、AI開発の先頭に立っているイーロンマスクやビルゲイツでさえ、世界的にAIの設計・開発・運用の制限や基準を設定しようと熱い議論を交していますね。

ディープラーニングでAIは何を学び、どのように考え、行動し、進化していくのでしょうか。シンギュラリティ、人工知能は本当に人間にとって脅威となるのでしょうか？ 脅威論が先に立ち、AIの進化に「人間の存在ありき」で一定の制限をかけようとする動き。究極の結論の一つとして、未来の地球の為には「今の人類」は不要なのかもしれないとSF小説的に考えてしまうのは「人間の倫理」としては誤りなのでしょう。

今後「今の人類」はどのように技術の進化に順応しながら、地球、そして宇宙の中で存続していけるのでしょうか。もし知識だけでなく知性や記憶、五感等をソフトウェアのようにヒューマノイドロボットへマイグレーションできるようになれば、肉体が減んでも生命（生きている感情）は永遠の命を得る事にもなります。

2045年と言われていたシンギュラリティ到達、予想以上の劇的なAI技術の進化により、到来時期が早まるのではと見直された2029年まであと6年、AIが人間の能力を超え、人間の英知を超えた世界観、宇宙観を持ち、生命の起源や進化、宇宙の誕生、そして人々が神と呼ぶ存在にまで触れる事ができたなら・・・悠遠の昔から続く数々の疑問への解決の糸口が見え、その時は初めて「今の人間」の思考の限界を理解できるでしょう。

シンギュラリティ、ASIの創造する世界に想いを馳せつつ、膝の上の愛猫と一緒にAIの世界とは真逆のゆっくりとしたひと時を楽しめるのは「今の人間」が享受できる人生の恵み。

ところで・・・「A cat has nine lives」・・・猫は宇宙人？

ニャンチのまん丸おむすび頭を撫でながら・・・君の瞳に乾杯！！